

平成28年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業



門川研究者による実践研究

平成28年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業（主催＝日本武道館、全日本柔道連盟、日本武道協議会）は11月4～6日の3日間、東京・春日の講道館で行われた。本事業は、平成24年度から完全実施された武道授業の充実へ向け、柔道の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について研究協議することを目的として実施され、今回7回目を迎える。

〇11月4日（金）

開講式では、はじめに道村信吾全日本柔道連盟総務部普及振興課課長が挨拶に立った。「中学生の全日本柔道連盟登録人口は減少傾向にあり、これは、中学校入学を機にやめてしまうことや、重大事故の発生が原因と考えられます。柔道における事故は、部活動現場での柔道を始めたばかりの初心者が多く、これにより柔道に対する意識が怖いもの、危険なものとなってしまっています。中学校武道必修化において安全で教育効果の上がる授業の展開が重要視されているのは間違いありません。本研究事業を通じて柔道授業を実りあるものにしていただき、各都道府県に持ち帰って指導していただければと思います」

続いて、内田康介日本武道館事務次長が挨拶を述べた。「新学習指導要領に準拠し、年間8～10時間の中でどのように授業を展開するのか、柔道の特性を踏まえて武道の意義、目的の理解が大事になります。2020年の東京五輪では、柔道に加えて新たに空手道が正式採用となり、一段と日本固有の伝統文化である武道に注目が集まることでしょう。それとともに中学校武道必修化にも期待が高まると思われます。本研究の成果が、広く学校教育の現場で周知され、教育効果が上がる柔道授業に繋がる有意義な指導法研究事業にさせていただければと思います」

続いて、高橋進研究者が武道必修化の実態に合わせた形の中で何ができるのか、またその中でも指導と評価の一体化に踏み込み、固めていくことが今回のテーマになると、本事業の趣旨説明を行った。その後、高橋健司研究者の司会のもと、16名の研究者から課題発表が行われた。今回の研究事業では、あらかじめ研究者に対して、1年及び2年の授業で①投げ技のみ②固め技のみ③両方行う、の3パターンについて、8～10時間の指導計画作成、また単元計画と評価計画が課題として出されていた。1クラス5名ほどの小さな学校や、1クラスに

柔道経験者が10名ほどいる学校、また柔道場がないため体操のマットを敷き詰める作業の時間を確保しなければならない学校など、様々な現場の中で工夫された授業展開が発表された。ここでは評価には触れず、2日目に持ち越された。

○11月5日(土)

午前から午後にかけて、1日目に発表された内容をもとに、練馬区立貫井中学校の生徒(柔道部15名)の協力を得て実践研究を行った。実技を交えながら実際に指導した後、観点別の項目について何を評価するのか、発表された。

門川俊介研究者(宮崎県)の発表では、技能テストで相手を抑え込むことをテーマにした抑え込みの授業展開が発表された。一人が仰向けになった状態で①5秒の間に抑え込んで、30秒で相手が逃れられないようにする②30秒間の中で相手が逃れようとするところを抑え込む、という2つのテストが行われた。評価の課題として生徒同士の体格差が挙げられたが、これに対し田中裕之研究者から柔道の難しさである評価の客観性が求められる中、ペアを変えて複数回テストを行うことが提案された。また森英也研究者から抑え込みの逃れ方も指導できれば、逃れられた生徒の評価もできるのでは、といった意見が出された。

続いて教室に移動し、熊野真司研究者より「学習指導要領改訂を見据えて」、田中裕之研究者より「アクティブラーニングについて」の講話が行われ、2日目を終了した。

○11月6日(日)

3日間のまとめとして、第一分科会「関心・意欲・態度」第二分科会「思考・判断」、第三分科会「技能」、第四分科会「知識・理解」の4つのグループ



グループ討議の様子

に分かれ1年次の授業におけるAパターン(投げ技主体) Bパターン(固め技主体) Cパターン(投げ技・固め技)の指導の中でのメリットとデメリットについてグループ討議を行った。発表では次のような意見が出された。

	メリット	デメリット
A (投げ技)	2,3年次でより発展した学習ができる	安全配慮がより必要になる
	生徒の興味関心をひく	固め技より運動量が少ない
B (固め技)	怪我のリスクが投げ技よりも低い	技能差が出にくいので、評価が難しい
	投げ技よりも生徒に考えさせる授業がしやすい	柔道=投げ技のイメージが強いため、柔道に対する興味関心が低くなる可能性がある
C (両方向)	柔道の特性にしっかりと触れることができる	時間の確保が難しい
	全体のイメージがつかめ、次年度に繋がる	一つ一つの技能の定着が難しい

続いて評価法について磯村元信研究者より講話があり、研究者6名から3日間を通じての感想等が一言ずつ述べられた。

閉講式では、研究者を代表し高橋進研究者が「この3日間を通じて、多くの疑問が湧き出てきたことだと思います。安全や評価の一体化を考えるほど柔道の特性から離れてしまうのではないかと、運動量はどうなのか、という壁にぶつかってきます。次の段階は、その時に新しい視点を持った、不可能を可能にしていくことへの挑戦なのかなと実感しています。ここから先も歩みを止めず先生方が現在持っている疑問に対してさらに対策を深めていただく、そのためには先生方のお力が必要となります。ぜひまた協力していただければと思いますので、よろしく願いいたします」と述べ、最後に端春彦日本武道館振興課副主事が主催者挨拶を行い、3日間の全日程が終了した。